

一頁で「馬上の訓言」について述べましたが、聖書に触れたことのある方であれば、これでハハーンとお気付きになると思います。そうです、マタイ伝第五章「山上の垂訓」を文字っているのです。ここではあまり基督教に触れませんが、毎日曜の礼拝や聖書音読、聖書からの頻繁な警句の引用は英語学習に不可欠であったでありましょうし、熱心な清教徒教師の指導のもと、極北の地での禁欲生活の上に厳しい学習と過酷な自然環境はたちまち純真な若い学生達の心をとらえ、熱心な基督的生活者となり、二期生の内村鑑三、内田漣を含め多くの学生が洗礼を受けました。かれらの功績は以後外国人牧師に頼らない独立した日本基督教会の礎を築いたことです。

しかし卒業生からは基督者だけでなく、岩崎岳東のような国粹主義者も生まれれば、佐藤昌介（後学長）、宮部金吾（植物学の祖）高木玉太郎（化学）広井勇（土木）などの学者や指導者を輩出しました。

現在まで我が国の英語の達人に三傑ありと言われ（薄ペラペラ人でない）、そのうちの二人が農学校出身の前述の太田と内村と言われていますが（後一人は岡倉天心）、どれほど勉強をしたのでしょうか。

またまた自論で恐縮ですが、彼らの努力もさることながら、やはりそれまでの幼少からの漢詩漢文の素読にあったのではと思ひ当たるのです。「やまとことば」をまず詩作し、全く異なる言語文法である漢文に変換作成し、推敲を重ねるのは全く英作文と同じではありませんか。

多くの明治人が苦学の末、欧米に留学し、差別され、苦勞しそれでもあらゆる分野で驚くべき業績を上げ得たのは、やはり言語的基礎学力であろうと考えられるのです。

お茶の間留学では結果は明白ですよ。

今、十七才の大島正健作「馬上の訓言」の全文をここに挙げて私を含め、その感動を読み取ることは現代人にはできないことでしょう（全文を知りたい方はご一報ください）。

横道にそれますが司馬遼太郎の「坂の上の雲」のなかで、私とはたまたま同姓というだけですが四期生の志賀重昂も歴史学者とされていますが漢籍に詳しく、日露戦争の旅順陥落時に、乃木将軍の漢詩を添削し、本人をして未だ無学なりと嘆かわしめています。すごいですね。何かしらの自慢話ではありますが。（その8 につづく）

さて Clark 先生はかつて華々しい戦績の軍人でしたが、部下を多く死なせたため将官昇進を固辞したと記録されています。一方黒田も後年尊敬する先輩の西郷隆盛を追誅しなければならなくなったことは、まことに米国の南北戦争の Clark 大佐、我が国の西南戦争の黒田中将と、対比する過酷な歴史の皮肉事となりました。

またまた自論ですが、もう一つの黒田の功績は当時絶対的権力者であった明治大帝に北海道への行幸を具申したことです。

帝もまだ危険であった未開の北海道に程なく遠征し（明治14年）、農学校を視察し、しかも馬上の訓言の地に休息され足跡碑を記されたことです。これは賞賛を無言で示されたことになり、これで何人も農学校の業績を否定揶揄できなくなったのではないのでしょうか。

残念なことは Clark 先生ご自身が帰国されてから、晩年あまり恵まれず、一大事業も失敗に終わり、10 年を待たず亡くなられたことです。まさに燃え尽きたとでも言うべき生涯でしたが、帰国後も文通での指導を惜しまず、教え子が教会を設立する時には寄付金を送るなど、日本人生徒の成長を誇りにしていたことは魅力の大きい人でした。

明治の人々は洋の東西を問わず、深謀遠慮、威風堂々どうしてみんなこんなに偉かったのでしょうか。

了